

養育里親

～もうひとつの家族～

4

坂口 伊都

はじめに

養育里親に登録し、もうじき 1 年を迎えようとしています。まだ、我が家に家族は増えていません。里子さんの話が全くなかったわけではないのですが、児童相談所から伺う希望と我が家の抱える事情が上手く噛み合わないまま過ぎました。

養育里親になっても、なかなか子どもを委託されないという事は耳にしていましたが、だんだんとモチベーションを保ち続けることが難しくなってきました。何とも言えない、暗い気持ちになってきます。里親登録をしてから 5 年経ってから子どもが委託されたという話を聞いたこともあります。養育里親が高齢化しているという問題も片方にあり、このまま待ち続けてい

ると私達夫婦の年代も祖父母世代になってしまうのではないかという気もします。子どもの生い立ちを考えると、待つ時間ぐらいたいしたことではないかと自分自身に言い聞かせようとしています。先の見えない待ち時間は想像以上に堪えるものでした。養育里親をしていく覚悟を決めるにも相当なエネルギーを使っているのです。そのモチベーションを維持していくことも同様にエネルギーがいるのだと実際に体験してみても初めてわかりました。

さて、気を取り直して今回は家族で過ごしたファミリーホームでの体験を書いていきたいと思えます。

ファミリーホームとは里親が経営し、児童定員 5～6 名、養育者と補助者があわせて 3 名以上（措置費上は、子ども 6 人の場合、常勤 1 名と非常勤 2 名）の施設を小さくしたものではなく、

里親を大きくしたものという説明が厚生労働省から出ています。一般的には夫婦と補助者で運営され、夫婦のうち一方は、外に働きに出てもいいとなっています。児童養護施設等が、職員を養育者・補助者として行うものという形態もあり、ファミリーホームに生活の本拠を置く者が必ず1名いるという条件があります。ファミリーホームは、子どもを養育者の家庭に迎え入れて養育を行う家庭養護であると明確化しているので、施設として運営されるグループホームとは違うという位置づけになっています。ただ、夫婦のうち1人は兼業でいいというのは、いかにも日本らしくファミリーホームだけで生計を成り立たせられるわけではないと言っているように聞こえます。

我が家で養育里親を目指す事になり、言葉ではなく五感を通して少しでも感じられるように夏休みを利用して福岡県に行く計画を立てました。行く先は、里親の家族が5件とセンターホームがあるNPO法人のこどもの村福岡とファミリーホームが制度化される前から実践していた土井ホームです。

こどもの村福岡は、1949年にオーストリアでSOS子どもの村の組織が設立され、SOS子どもの村インターナショナルの下、各国の自治組織が連携を取りながら活動をしています。子どもの村福岡では、単身里親の方が多く、自然豊かな土地に建てられています。子どもの村福岡の強みとして、協力企業が後援会としてしっかりと存在している点が大きいと感じます。いろいろな活動をする上で、資金確保は大きな問題となるので、企業と連携できることは社会的養護の場で生きる子どもにとって、とても大きな力となります。

今回は、ファミリーホームの「土井ホーム」で過ごした出来事を中心に書いていきます。

出会い

土井ホームの土井高德氏とは、facebookを通して交流させていただいていたので、夏休みにホームの見学をお願いすると、何と「よかったらホームに泊まりませんか？」と声をかけてくださり、お言葉に甘えて2泊させていただきました。

土井さんとの約束は夜だったので、それまで福岡観光し、緊張ぎみに出向きました。ホームのリビングには、高校生の男の子がテレビを見えています。よそのお宅にお邪魔したのですから、もちろん挨拶から始まりました。中学生になりたての息子と小学5年生の娘は、モジモジと挨拶をしています。その時、その高校生の子が「僕は、中学生が嫌いだ」と息子に第一声をぶつけてきました。息子はうつむき、聞こえないふりをしながらも目が泳いでいます。後で、大丈夫？と声をかけても、別にと答えるだけ。とても新鮮な先制パンチをいただいたのでした。

私達は、ホームの皆さんと朝食からご一緒させていただきました。子どもだけでなく、高齢の女性もいて大人数での食事となりました。食事の中でも、誰が上なのかが伝わってきます。早く食べる子、ゆっくり食べる子、話したい子といろいろです。上の子が、下の子に早く食べるよと言っていたので、娘に早く食べやと言うと、その上の子が「あっ、お嬢ちゃんはゆっくりでいいよ」と言ってくれました。京都からきた珍客にホームの皆さんも気をつけてくれます。お互い緊張しているので、会話もまだ弾みません。

人が暮らす習慣の中に自分の身を置く行為は緊張するものです。社会的養護で暮らすことになった子どもさんの入所初日は、どの様に感じているのでしょうか。多くの子が、入所当日のことをよく覚えていると聞きます。

児童養護施設等で暮らす子どものケアの中でも入所時のケアを丁寧にしていこうという考えが広まっています。入所時のケアをアドミッションケアと呼び、ケアを一貫したものにするために支援方法を児童相談所と施設で共有します。また、子どもの不安を軽減するため、施設の具体的な生活や「子どもの権利ノート」を使い自分の持っている権利、入所することになった理由、入所期間等について子どもの年齢に応じてわかりやすく説明をします。

ケアを行う施設側は、入所する子ども、親や家族の不安をどう軽減できるかという視点を持ち、意向を聞き取ることも求められています。さらに、既にいる子どもとの関係や家族と分離する不安、新しい生活に早く馴染める工夫等を考えていきますが、そこには全職員の情報共有が必要となると言われています。

入所時のケアも大事ですが、その前に子どもは既に一時保護されている経験を持ちます。一時保護とは、児童相談所が調査や検査を行い措置決定するまでの間、一時的に保護することです。児童相談所に併設されている所もあれば、里親や施設に委託する場合があります。緊急一時保護になれば、準備をする時間などなく子どもがやってきます。来る子もそこに暮らす子にも衝撃が走ります。

一時保護中は、学校に登校することもできませんし、いろいろな年代の子どもが生活することになります。子どもは、自分の家庭しか知らずにやってきます。虐待を受けていたとしても、日常生活の中では穏やかな時間が流れる時もあり、「お家に帰りたいよう」と一晩中泣きじゃくる子どももいます。子どもに与える影響を考えると、どのように保護するか児童相談所のワーカーを始め、関係者は慎重になります。

子どもは家庭から一時保護所に行き、施設入所や里親委託が決まり、やっと慣れてきた一時保護所から、また知らない違う場所に連れて行

かれる体験をするのです。

以前、新しい場面をととても嫌がる子に出会ったことがあります。その子は、社会的養護の場で暮らす幼児さんで、新しい場所に連れて行かれると全身を使って泣いて抵抗しました。その子は、わずか数年の間に3回、生活の場所を変える体験をしていました。その子は、家庭から乳児院、そして2か所目の児童養護施設で生活していました。小さい身体で、怒りや悲しみ、不安を訴えていたのです。

子どもが小さいからという理由で、急に住む場所や一緒に過ごす人が変わったら、子どもはととても不安になります。里親家庭に迎え入れられる時も、玄関で立ちすくむ子どもさんがいると聞きます。我が家に来てくれる子には、私達家族のもとに行ってもいいよと了解をもらうことを忘れないようにし、少しでも安心できる迎え方を家族で話し合おうと思っています。意識しないと気づかないようなことから丁寧に子どもに伝えていくことは、支援の第一歩だといえるでしょう。

交流

土井ホームでの初日、緊張する我が子を見ながら、どんな風を感じているのだろうと不安を感じていました。2日目の晩、土井さんが子どもたちのために花火を用意してくれました。夕食が終わったら、花火大会です。

土井さんと夫は晩酌を楽しんでいましたが、私は子どもたちの様子を見たくて、花火大会に紛れ込みました。我が子よりも年上のお兄ちゃん達と大人は私一人でした。始めのうちは、大人しく花火をしていましたが、だんだんと花火を回してみたり、何本かまとめて花火に火をつけてみたりして、その場が盛り上がってきます。

テンションが上がった息子が、あるお兄ちゃ

んのマネをして何本かまとめて火をつけ始めようとすると、それをし始めた子が「危ないよお」と息子を止めようとしている姿が滑稽でした。他の子も、私達に花火を渡してくれたり、前回の花火大会の様子を聞かせてくれました。初日に「僕は中学生が嫌いだ」と言っていた高校生も、笑顔でいろいろな話をしてくれました。

初対面の時は、誰でも緊張します。中学生が嫌いな高校生も息子も、どちらかという緊張が高い方なのでしょう。慣れてくると、2人とも笑顔で別の人と遊んでいます。この2人が関わりあうには、もう少し時間が必要なようです。皆で、楽しかったねえと言い合い、子どもたちの繋がりができ始めました。これも、子どもたちの力なのですね。土井ホームの子どもたちは、他の人と関わって生きることを学んでいるのだと感じさせられました。花火大会の後もホームのことや福岡弁を教えてくださいました。

3日目の朝、土井ホームとのお別れの時です。お礼を言って、車に乗り込むとお兄ちゃんたちも出てきてくれて、車が見えなくなるまで手を振ってくれました。土井ホームの子どもさん達は、自分の目の前に家族で現れた私達をどう感じたのでしょうか。自分の家族を思い出したりしていたのかもしれませんが。温かく迎え入れてくれたことに感謝です。

再び

翌年の夏、土井さんから子どもたちだけでも遊びに来ませんか？とお誘いがありました。息子は中学2年生になり、卓球部を休みたくないで辞退。6年生の娘は、いろいろ迷っていましたが行く決めました。自分だけでいくと寂しいかもしれないけど、少しは里子ちゃんの気持ちわかるようになるかもよという言葉が、背中を押したようです。

行きは、土井ホームの皆さんが奈良に遊びに来ていたのでフェリーで行き、帰りは娘一人で新幹線に乗って帰ってきました。

いろいろと遊びにも連れて行っていただき、新しい友達もでき、興奮して帰ってきました。「〇〇お兄ちゃんがね、遊んでくれたの」「△△ちゃんは、嵐が大好きなんだよ」「◇◇お姉ちゃんに一言だけ声かけられたの、緊張したわあ」等と話してくれます。また、来年も行くと言っています。

人との関わりは、言葉では通じない何かを持っていると感じます。息子も娘も実際に皆さんと出会い、何かを感じてくれたのだろうと思います。最初の夏の体験の後で、2人とも里親を辞めようとは言いませんでした。里親をしていくと決めるには覚悟がいます。知人に自分の子どもを犠牲にするのかと非難されたこともあります。里親も里子も実子も互いに「人」として認めあえることが大切なのだろうと思います。社会的養護で暮らす子は、可愛そうな子ではなく、「大切な人」なのですから。

お知らせ

「土井ホーム」の土井高德氏の
著書を紹介します。

『思春期の子に、本当に手
を焼いたときの処方箋 33』

小学館 700円+税

好評発売中